春城日誌

明治三十八年
第七月以降

特別
14
1919
543

176808

明治三十八年七月以降

春城日誌

七月一日

一、今日も午前中事務室に閉じこもり大部分を終了す。図書係在勤中の通信簿を作製す。

一、午後一時より図書館を開きしも来観者なし。

一、午後四時より図書係を集めて事務を協議す。

一、午後五時より教育会に出席す。

一、午後六時より三作訪ふ。鍛冶屋を営む。石井勇吉氏と同郷にて来る。

38- 9329

二日

天候未回復セす、今日ハ会葬也、依而図書館
不参し、伯爵大隈侯を訪ひ、式会ニ上来る、今
日ハ伯爵邸ニ於て話識殆今を要し
ニ決す、坂本三郎ニ書を与ふ、萬巴鳴書ハ尚
ニ接す、書（作成）作成来訪あり。

三日

晴、早朝会員来訪、会務を処分して出る、図書館
ニ至し、仕事ニ関し、東京豊川坪内、寺尾、並谷
其他ニ参候、録録を送し、又紀念図書館ニ至る
ヲ送りたり、今夜ハ珠琉ノ名を読みて鏡ニ向
叢書ヲ図書ヲ帰し、坂本三郎来訪、晩餐
ヲ共ニして互ニ語り、他日の法律図書館設を要
す、意地峠ノ来話、新たに一会員の
事ニ接す、

四日

晴、早朝会員を訪ひ、会務を打合せて出で
参校録録を送す、今夜ハ由子と共
ヲ担して大学を見物ニ散歩、石井兵衛
依頼し、銀座ニ出て来由ニ至り会員ニ接

送す、而已陸軍十三師団報告
の部書に拠る、八月廿六日
報に来る、江都漢夫未完、

五号

而、堺病院急遽其許ら
衛生訓令大概在者ら後を高らし本
り示す、迅利前野
を記る、石塚ら
息ら妙井澤
の書ら拠

病院を設け礼儀典ら
婦の処置ら七十日
報に来る事業
大変生の御思召
を出御ありて、
久保田石次と共に
柳ケ谷に休に関
を典ら

而、収時、学務部会

即ち之を綜合編輯して、一書を編纂し、其の材料を墨堤の古墳に採り、撰次を托するに、二女三女嘉言を以てし、一切の事務を取扱ひ、

七

時々平朝香宮邸又は小石川植物園内の旧幕時代の地方札并四枚を恵まるゝ中、西ヶ札七枚と、多治中一薄田兌敬（斬宝）博士の蔵の如く、私を驚かして、

[illegible]

京橋區

余が編輯に主として従事せる件に関しては、中井敬所翁の書翰と、翁の嗣子猶次郎氏の早稲田大学の校印之洋解を快諾せられ、又新聞紙上に掲載せる談話又墨と列を利用せる旨の印刷物を贈られ、十五日お邸を、一と先づ辞して、後ほど参上すべき旨を申し入れ、公爵より関する件に関する件

時、朝鮮の高等学校を当分廃止
決（同時に校正掛らるる筈）
十時より参校、午後
より図書館に於ても
き、教案を書きなど
閲終了、明午後
堂にて送別の宴
仏の話、次に二三の
す、来る十一日より
卯の花の句を
に於て送別会

清義氏ニ離弄を識す、四郎とも石坂[illegible]
一場内と高田氏ニ招かれて晩餐の饗を
受け雨ふりて帰る

十四日

晴後、早稲田大学来り[illegible]
ふ、[illegible]
来訪をもとひ、任ニ木村[illegible]
参観[illegible]を定む、[illegible]
[illegible]、書[illegible]
閲し関ニ[illegible]の[illegible]ニ[illegible]

樺太占領の公報出づ、三時頃より大雨あり

十五日

雨、石[illegible]一より川部両谷[illegible]
[illegible]を[illegible]、[illegible]
[illegible]ニ臨み[illegible]を定し[illegible]
[illegible]を進して上[illegible]
[illegible]池[illegible]
[illegible]
[illegible]、[illegible]
り来る

十二日

雨、杉井外流亦雪を冒して来る。
休す。昨し来訪ありし、中山九郎氏に関
し、黒川の説等を聞き、且つ牧野伸顕氏
薄田斬雲似幻閣を訪ふ事を約して帰る。
途輪して手紙を認めて、又後田信重氏
へ書状を認めて、雪を冒して列行す。夕井上勤
君あり、小松原参謀次長の塔
雅望の由(一昨日)と云ふ特報を齎らす。
来一緒に帰りまで書状を決定して今

十三日

昨、主婦又少々流行感冒に罹り、休
業をなす。午後参謀本部に小松原参謀次長の訃を報ず、午後
二時我の基督教徒なるを以て、四谷大隈邸
つき葬儀次第を聞き、引つゞき麹町の一ノ橋教会に
て、故人の霊を慰むる為め、追悼の祈禱を受け、午後五時
半帰宅す。夕食後、軽部来訪、軽部を送りて

十四日

晴、帆足穂村等幼、田島氏一
六の死を弔ふ、利行等の俳句つき
を終る、琳琅会と同書を校訂
す、二月十日ドレスデン発山田治郎
印度留学の途に就き来る、春海又吉の
ため送別会を市役不二楼に設
向に係る同志銀杯を贈る、小山田助助と日露

十五日

晴、早朝前日の慧雲を西片町に訪ひ利行等の
活版代を払ふ、夫の帰途を送りて、琳琅会と
支那恵通寺に一個を得、王右軍
書帖一冊を得、直ちに装幀を為し終る
き刺来、参校修訂を了る、夜に書を校
了す、湯島聖堂に於ける釈奠式を参

く、右手の指先を約数回ふるわせ、次
いで大きな声の湯呑茶
わんを出す、右腕全体の震えを注意
深く観察する、震えは止まる
ことなく震えつづける
十七号
時、午後又、林檎二個を食す、
二個のうち一個を食べ、残り
今日の午後、伸二に与える
出来ごころき出す、伸二は
喜んで林檎を受取る
等と別段に小さめをつまむ、十一時家を出る
木部薬局の者と挨拶
十七号
時、当局より依頼ありたる、利行会の保育
林檎二個を家族に与える
部を終了して帰宅、家族
の者と挨拶す、関ヶ原駅
四名乗車、駅員二名
アレクサンドロフキー港を上陸
者の取扱をする、又紀念

共和の出版之保護十箇条を設け
事、開拓三十箇年事業、
設置すること、修史館を
の意を以て、木版筆耕
死に至るまで、
し、帝国大学
今を以て
人の体裁記事
ずることを
リ

十月

十九

西風、が春季代を報えて秋季の季節を告げ、木
々に落葉の色彩を深めつゝ、其年も既に終末の
近づきつゝある今日、余は此の年間の事件の
行程表を作しつゝある今日、

会合

警察署の調査部は、其年度に於ける犯罪の
状態を考察して次年度の改良を図るの
為め、犯罪の件数を調べ、之に依つて、その
法をあみ、又刻々と変化する社会の情勢を
研究して、警察上の施設を改良するの為
に、集会条例の改正を行ひ、又は、新に
法律を設けて、取締の方法を設けるの
である、

会合

時間前に会場に行き、席を取る、
と書を投ずる、
如き、刑行為と雖も、
犯罪と認めざるを得ず、
況んや、更に去月九日

俄の好意を謝し、かつ末永く
互誼を保たんことを望む、

念三日

晴、来客を招きて朝餐を共にす、午後
為す、来人有栖川小路入 細長町、浜纖次郎
訪ふ、当日朝餐の献立、浦細魚の酢漬、
ふ、細細魚の酢漬、牛酪又は一種の
ふ、また魚の酢漬にして作りたるもの
提ふ、訪客来る毎に行李を開き書籍を
訪ふ、

念四日

曇、午前帝室博物館に至り、古代の書
画、古代の朝服等を観る、午後又博物館
を拡張し其の工事の終了を祝する為め
ふ、史徴墨蹟二冊を購ふ、珠玉名
手続をなす、利行の印刷に関し当地
を訪ひ、林を訪ひ、また
当地の文

頒布するの草稿を整理す、

会合

是日午后社員を招き二三の事件を定む、桜井
氏来訪、大阪行につき二三の依頼状をもたらし来る、
来遊文吉氏を訪ふ不在、増田義一氏井上君を交へ
業界に於ける翻刻刊行者の一件に関し協議を
遂げ更に翻訳権保護を論じ弘文館と刊行者
の印刷協定に関する契約書の
主要を概し依頼一件を依嘱し午後三時
家に至る、西川太治郎氏今井義男氏来る

山田委員紀念状に関し来書あり、塩澤昌
貞氏より書を与へて大阪翔の衛生事務所事務
の請求を為す、本郷事務、晩に於ける事務
有益一件技術のことを話す、技術者へ十四日
交付す、乾燥技術者に来訪、談話をな
さしめたる

会合

是夫、恭校諸氏を会す、十時より増田翁後を訪
ひ来事を依頼し文並に翻訳一件を依嘱す又弘文館
と刊行者の契約書の草案を作る一時より弘文

御手もう多抹茶碗を契約書を取交す
又仏文部もも修学をもつ四五の四名
後もこれ一八ヶを解かて
指名又寺部屋もも北の上部望可立者
地位物件の報もも、松もう今も四五名分
業務人もも主しもう回書雑文件の関し
弁会をもも、もも多もも振もも五もも
い

会合

墨、修業庭部もう多勤一名かいる、林

東京製

空三を転き銀行をもの、薄田新雲事務
主出面事無紀会報しも我料を指什旦
つ海輪の事会をもも生もも
もも仏文部、もう今弘をもし、中豊川
言主をこ事文こ部の不為 異名と七もう多
不こ抗しも言もう、か無事務久多院
三七事もう流す

会合

小雨、高面を部の生猫乙清もの事務一よ
りも来もう松事もの体のこ村机御もす波
多無表表を認む多もう(乙)し部屋也

三十日

婦女子に関して也、

三十五

雨、各校修身を課し生徒を感ぜしむ、江部淳
夫の書を模写し又小学生を教ふ、田辺某の
書に接し、小林豊太郎の書を模写し、建部
遯吾の著書を読み、佐藤の遺
稿に就て[illegible]を読む、平次郎と中島益
吉を訪ふ、[illegible]に刊行の事に[illegible]、昨聴
を訪ひ細説を日報に記し、[illegible]弘文
館に立寄り、[illegible]を見る、刊行の事

又同内の書を校す、本日通知を受く、森
泰弘法大師の真蹟を見る、為に[illegible]に
つき書二帖贈らる、昨日京城より[illegible]
三百五十円を借受けし七月[illegible]、右は本
紙給料、坂江[illegible]より満洲の視察
をなし入京し報あり

八月一日

早朝木屋三郎兵衛平の訪ふを
多賀坂と向ふ坂西まで
三船別荘のそば残し
祝奏中の坂口良時神
ゆきの如く、
のち山田家西年
す、出仕中と範を
行をもつて行
山家後又田舎京都行の汽
車を
来客をなす千的六的西、高井氏
正しの事又、ゆふ後
手岡一軸装潢等
又旅中清岡の具と
李を取り倍修
多し多京坂又
清を世ふこと
きれ

二日

雨、午前七的半今宮神

雨、早起修をつき二三枚認め光芳おくる
今朝今日の田作小魚なども古波
起く、花屋に投ず、花屋のお庭を吐
月
及釣竿釣を譲りもとの
東京のお宿し、支度をお食をすし
て一九とうとうそうそう、大山鳴次郎と左之助
をまねきて歌留多、秋谷子爵等
刑行をしるを話しつまりて別る、
夜刑行をしるを嬶雄三宅
繋を報ずる乱れ打ち且つ山と峯の
あまりなる社内の回章を一読す、

こ抜郎す

四

早期長谷氏例来訪、折柄発之庭中静坐を
試みんとする際、大雨俄に降り出して絶へ
ずなりしが、暫くして漸く雷雨も止みたれば
之と行く、書肆は林友氏が在りしか、二階にて
通る其の蔵書を見る、近江読蔵書
法中易（宮氏易説詳解）数十冊、特装
擲古燕花野客叢書（擲古書（下））、元
七無延の書、彼の為めに礼儀経典、附録

三十七を購ふ、又鳳鳴雅集、拾遺の人
賦を購ふ、刊行者のものを探して去る、書肆
東坡中にて中にし、後に因書館にて今井
彼方を訪ふに至る、又館内を一覧し其の
蔵書を見る、彼の蒐集せる内藤湖南
の蔵本二三あるも中にも紙さへ新たに五石を
惹きしも子昂節一帖、十六羅漢の横軸
其他の論語疏零本（永正年中書写）（あるも）
元典三年（寛政数十冊）其等ありしが、彼
は之が為を来三十行り、又書房に訪ひ、又書肆
談術を読み、手帳を見るに出るを

不過、五谷を大阪毎日に紹介
毎日の今井、例くは即ち
未だ、ともと云、大に紳
を送るも其の揮毫を需む、
きを以て、又
事に、京都
事書と振り

吾

妹背、今日の書と振り五
おうとつゞき老生此事の
り多忙の
昨日、早朝
田伸一四郎
民一を同書
災を慶祝
印を捺し
言ひ
君
忠治を
毎
お

三宅坂二幸書と梅子
外子の作業の終るまで
のまを託す、家政婦
の都田梅と晩餐の御
と伺へる

時、帝国永洗の訃を接す、直に弔詞を送る
飯田町田志沈を訪ふ利行不在
訪ふ、又芝川漆芸家平を訪ふ、七時
帰宅、福沢中一家御来訪
如き別荘を車にて上る社頭の停車場
迄り来る、約十町余
と話す、福田素と
の書と接す、福岡
多福田を招して
四條を数第
を納む、中村屋
二一越を約し十二時就寝と記す

雨天、小林豊吉小林啓三来京出も花房等
へ郵書を出す、又三浦伴象に手紙(御使
後え)、あり御来の途上らんとするも唯を
学生嵐山行を企てあるの福田寿三郎
と共に二条の停車場より嵯峨に至り着
直に嵐山に赴き、偶ゝ大口観次が女学会の
女流を伴ふて保津川に遊ばんとするに
会し、ともに同遊を流し十一時頃嵯峨より
舟にて保津川を沿ふて亀岡に赴きそれより
汽車に乗る、午後四時嵐山に着き余等之入
小温泉場の旅亭に入り大口等と三好亭

こは想ひしよりあまりおもしろく、浴後兵糧をと
下物に麦酒を飲む(余は嵐山の鮎を賞し
酒特に一杯を飲みなるに過ぎなりし)鮎の
風味殊に美なり也、三時頃帰途に就き帰路
途に立ち寄り果物屋和多へ寄り其れ又步
を訪ひ六時頃京都に帰へる、晩飯なし
御福田と京極通を散策し四條橋
下に涼棚を見つけて納涼、十時過帰宿に就く
本日の汽車費は保津川舟遊に記念
絵はがきを郵送す

炎暑凌ぐがたく、毎度一行に筒す、京田牛
蜂しを以て申述す、大に難次と和歌を記め
ものくれたり、信濃川流れ、一組の絵そうきを
来し、其心得なる一組の絵そうきを
送し呉と投す、其外仲未生
送早稲田大学なる教之の高弟名を
記くる、正な書原事務田山の事の播
と名の響を受く、此の播うて大恩
給と陰徳し、生てもの御行を立は歌
ものをそなる不同し大度ものと風を納ん

東京堂製

就ては二時之を別る、高峰ものと共
二冊を持ち呉れ、高峰ものと共
印事務、野を主の主を招也、福田素こ
同伴大坂に向ふ、京都に揮ものと
と同事す、大に歓ぶ、途船を待ち
くるも来ら出し納涼ものと
十時頃我く、佐藤ものと
ものと家代ものと

九日

風、お谷石倒事終利行ものを協御ます

也、

十日

晴、お谷方へ来泊、朝食後、砧川、十橋、
橋桐原（橋と）三軒、桐原君在宅、面談七、
来の手筒六枚を贈、伊藤仁右衛
門、学校高木氏を訪、
夕刻より余ら八人、寺田社友、今井豊一、町田忠
治、川島清治、お谷方へ会集、
お谷方の休所にて酒宴を開き、
利行会の体を協議し、十時散会す、小森
望三の家を訪ふ、
帰宅と決す

十一日

朝起、行李を整ひ、
谷方へ茶等交々来る、
お谷、吉郎より来訪、
うめも来る、また
多刻より余ら八人、寺田社友、今井豊一、町田忠
治、川島清治、お谷方へ会集、
お谷方の休所にて酒宴を開き、
利行会の体を協議し十時散会す、小森
望三の家を訪ふ、
帰宅と決す

す、余も直ちに四谷区内某ホテルに投宿、手紙書き電報物も発し終り、上京の事を報ず、上京後は先ず第一に高安氏を訪ひ、上述の事情を話して河文へ吸客の斡旋を依頼（高安氏は当地の有力者にて）、次に山松壽（校友）、木村清松（東京朝日記者）二氏を訪ひ、刊行の事、印刷の上、高安氏に於ても木村氏に於ても尽力斡旋の事を依頼し、尚ほ高安氏の紹介にて、河文主人とも面会し、河文にても吸客の斡旋方を承諾せられたり、

十二日

風波、到底の風味、船の全体を浮き上らせんばかりの一定の律動を有する事、船の動揺を利用して投じたる

十二日

午前中、又も四谷区内某ホテルに赴き、安人出でゝ振起を為さんことを訪ひ、則ち流して家

人と共に同宿せし一日揮毫を求め、而して今年十一月年の御書を拝す、中略の時節の伊勢和尚の事ども思い出でられ候、かくの如く候

十三日

雨、お供をもせず候の段を報じ候、紀念図書多く刊行の事ども思い出でられ候、かくの如く候

一、去る、奉呈の書と称し、五冊行李よりを見候、著者より、紀念図書を送り来る、仏蘭西の人、帳面を作り来る、珊瑚宝石を飾りたる、又、紀念図書を作る、千四百七十年の図書を掲ぐ、生田古市校友(校友)事務所より、三冊を送り来る、伊勢清吏、杉本忠治氏より書あり

十四日

朝、雪ふる、昨夜、釈迦仏を迎えるの式、終りて、

東京帝大

十分

借りつきし事済、参校、鈔録を忘しる収器
に到る、菊池晩香より清本の論読の鈔三
を借りて、且に居士を與ふ

念日

雨、冷気昨の如し、日曜日、豊川を訪ひて
今務を話す、前田慧雲を訪ふ、不在、珠
琳寄に圓寺を訪ふ、東條琴台係れ
坂本文の書稿各巻大概無沢の手
稿藁本に調和の印あるもの）一を獲
たり、正午刊行会の務子に至りて事を忘

其大坂の河田忠治西尾豊に書状を發す、大
阪の書を與ふ、和田某に書を寄す

念一日

曇天、冷気来たりて雄甚し、永谷寺
居士福中の範に、旭子花町寿し寺に
接す、本寺中東雲、浅井を通して
欄を考る、自伝目録を合纏めて百
流維細のもを収納、判行会に至り名
務を忘し、蔵書帖、宗方来話、
米堂に談話を収納しておく、大坂の

新聞の編者を出す、新聞紙未詳あり

余云

西米ゑんが、八月一日ホールトランド号巴船にて
の編に云ふ、清息あり、又七月廿日英字新聞
より新聞紙科抱月七月十日編輯局副修義
よりもの編に云ふを録す、其家の河郎秀氏
ならも編輯新聞を贈り来る、石井様出り
来る、又旦家其他の原稿議論し併てとこ
此志道来談あり、今夜余云ふ支那古田某位
来談、云ふ也とし原稿議論の併せ来る方の

伏書あらし後の始末契約略済み、願書を
くらて報す、江部編者ら与へ、給ヘリ来りぬ
す、石津氏君らとまた来ることし

余書

天気未明より、今朝六時より河岸
まで、局に向ふ、刊行等し、会員皆
集用也、午後六時よりの指揮局長石津君来社
稍勘停車場に出て見る、天守様より
内務高んらも来訪あるし、四時より帰
（操）と共に、訪の様子を旅て、速に

大候奏し朝年六両海を、寒気之人骨を砕
十餘)毎里を大火ありて二百餘戸焼失せ
るし、此の両郡より多の石炭を出す、
焼し也、故を以て利行なし、まを云ふ、
面最寒気)を以て、寒気を防ぐ、寒気
北光祀、第一番を招えて利行なし
ものを招ふ、北光祀を行ふ日を指し
二三の七寺を経ふ、人民多く参詣
帝参詣を奏ふ、其外を招ふ
出ふ、今年物価騰貴也、今年婚礼

第一ふ、郡の出つ、修繕不備を
先ふ、郡内ふ、郡内ふ、大国四を
郡家の道ふ、祝せさふ、金のこと
踏ふ、一和の祝祭を行けり

三十一日

早起、一二の仕事を終のち、来二番汽車
ふ、ふ、ふ、十時半の来停車場ふ、
ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、
ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、
を以て、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、

九月

一日

二時ごろ寝る

二日

晴ク私用ニ付キ北堂ヲ訪フ朝食ノ後
湯ヲ浴ビ、新聞ヲ読ム、郵便ニテ父ノ病気ノ
ホカ無事ヲ知ル、午後ハ北堂ヲ訪ヒ、
夕食ヲ共ニス、十二時ニ帰宅ス
真砂町ヨリ北堂ヲ訪ヒ、朝食ノ
ヲ済シ、十二時ニ帰宅ス

ちこくそうたいしゃ
うんそう用無ク
ふんそう、用無キヲ
祝ス、ハガキ
リ
ノ
一ヲ焼却ス
ヲ読ム、
大イニ興味ヲ

三日

の校正を了し、夕三時より帰る、七月休暇
じいぶらん又ハ武蔵野雑誌の原稿を書き
ついで、八月休暇中執筆せし大谷渓に寄稿
の新著を校了、菊池幽芳の撰中の原
稿を渡す。

七日

雨、小林清三を招きて大朝への校正を了す、今
夜を徹して新聞の新聞に投稿し新説を唱ふ、
傍ら伊三郎を訪ひ共に伊藤氏
に至り、帝国文学の件を話し、刊行を約す

雑誌の校正を了す、夕より浪曲を聴き、栗
林貞亮の書を読む、丹羽で青紙を求め
堤町の新居に落着き、原稿を整理す、文
学史の稿を続けて書き筆を止めしは、
古津飯田より帰りし、中の書を読み、花井卓蔵
来訪し、続いて書を読み、亦読書す

八日

雨後晴、紫安書店、鷲尾山田清作等の雅俗
稿を読むして発す、参考文献を調べ、鷲
谷津氏に会して利益の一致を見て来る、

同志諸氏へ其の旨を通知し、且つ本市中新聞紙上へ廣告をも加へ、尚ほ又新たに入場券を發行することの報あるまで、暫く休業する事と相成

九日

晴、午前より參拜者陸續として絶えず、午後に於ては殊に多く、一時頃より俄かに雷雨を催し、參詣者皆雨の爲め一時に散じ、境内寂然、紫煙出來、

十日

晴、日曜、來參者陸續として絶えず、又參拜を終ひて又參拜を始むるもの數知れず、利益を蒙むること實に數多、境内茶屋の如きは、殊に繁昌を極めたり、其中に一人の乞食あり、參拜者の來るを待ち受け、手を合せ拜み、其中一人の參拜者ありて、一錢を投ずるや、乞食は之を拾ひ取りて、又參拜者の來るを待ち受け、手を合せ拜むなど、實に乞食の手本とも云ふべき程の者なり、

十一日

晴、未明より參拜者陸續として絶えず、實に數萬人の群集を呈し、殊に

[illegible]、木村泰賢氏より近著
を贈られたり、左次の
京都の故次郎氏逝去
元晶の如し、早く寝ぬる忍びず内に
なる月に乗じて数行の涙を

十四日

晴、山田信夫氏、今井
今朝を訪ふ、午後
の雪と降る、小杉氏
命を絶つ、早朝

現く努力し、学
る度方を定め、
す

十五日

晴、曇、風強し、早朝
雪なり、十時より中
候し終りの所用
新年来訪、
二十七日から講義
十二月仏誕会

東京図書

十二ウ

十七ウ

十七オ

十八の

東京帳原製

時、宇都宮ニ到リ、直ニ停車場ニ赴キ、
新聞紙ヲ購ヒ、午後二時四十八分ノ
汽車ニ乗リ、同五時一分栃木ニ着シ、
人力車ニ乗リ、直ニ町ノ方ニ向ヒ、
途中ニテ、今井某ニ出逢ヒ、同人ノ
案内ニテ、同家ニ至リ、休憩シ、
直ニ出立シ、同六時四十分頃ニ
倭文ニ着シ、手提ヲ預ケ、
四頭ノ馬ニ乗リ換ヘ、
直ニ出立シ、

三十日

天気ハ晴朗ナリ、午前六時頃ニ
倭文ヲ発シ、午後一時頃ニ
会津若松ニ着シ、

を為す、蓋し此の役を傭車場栃木と称する
其の利用多く、今や殆ど利用する者なく、
殆ど廃物に属す、
故に、今日も此の十八里
の途中に峠と称する
所、数箇所あり、今井他
二人の者、今日四十四里
四頭の馬を雇ひ、
直ニ出立シ、

東京帝國

一日

雨、午後大久保、小栗、米屋三件ニ米義山山田
清八等事、書記ヲ命ス、当紀念日ヲ以テ
祝ヲ為ス、当紀念日ヲ以テ休業、
家来ニ書ヲ授ケ事ヲ終ル、
宮司参庁、

二日

早朝ヨリ奈良教院ニ於テ神祭ヲ執行
セラル、ヨリ参庁ヲ許サル、午後ヨリ
陽徳ニ在ル五十ノ

東京堂製

国ヨリ雑誌ヲ、ツヨリ事ヲ宮司ヨリ
刻版ヲ、之ヲ以テ
今ニ於テ今ヲ
田林初田等ヲ
宮ヨリ
紙、直江ヨリ中
リ祝ヨリ
書ヨリ
刊行ノ
大法ヨリ
直ニ

御もて遣す、奈枝御方を
刑行なるやう〳〵事柄を
即牛山より書を書を
時間ハこれ金子人と
御安堵と地ら、是即枝奈
事なるやう、御谷石御
の書と被す

七月

雨、早朝海を高と長
辛助役しまをもつて、奈枝御方
の御を元気ら、田家の書と被す

廿日

晴、はま、早朝御あり来、
埴谷正五の御をこまる、
つき被す、奈枝御方、
利なるやう今後をもつて
多平へ来給ふも、ほ内御義衛もも亡鋭加

の遺行を終る事を、早速の答を持つ事也、
日時限定、九六の外仮令
ふるまひ仕掛ゑんとも
二階之間可然候、当人宅蔵の貨
物五十表也、其の雇ふ山の
秘し我料をとるまじき事也、
ま、此答即ち
生の如く、又
也、

時、最、好機を
会典を以ます、
物事、日本に
多くの利の
抜ものを
国と宮の太政官
を抜き利の
ふも答を
を電報し来る、
ふ元の事を

術創業
ゆるせる
沈没
を持ふ、
早速整
書面
を抜き、
御綾の
模井の
ふ、

十五

十二号

十三号

琳琅閣よりも本日北海の雲龍比丘法帖
白龍（黄子）鴻雪（栗本）鐵崖の画帖
を携へ来る ~~拝借書目~~ 木邨余市より
明朝日傳前時計にて返しくれと云ふ来る
其の時乗前時と云ふ文の如くを四度す
し明日の時計四円を借す、私なる文二にて池
傳右衛門談を命ぜられ行く
立雅の藥田豊三郎より唐紙四枚を送り
来る、我々又山田清作氏余務につき来訪
今年三十円を借す、加賀田金三郎来訪、
又中井次郎より割栁を借りに来る

新年来訪挨拶に接してせまり大道
書く

十四日

晴、伊東金助来訪、寧斎文学より参與して
つきしろ十四日同書館へ備へしを戻す
本年諸公務を取調べ、都築氏羽山
尚徳大江氏等の取扱ひ来訪其の
我の ~~[illegible]~~ 如くして出す、参政御殿に
出す足利の来訪者来訪あるに、總代金銭を
と余務を返す、高山生三木邨余市の書

お、早朝本部参事会ヲ
催シ支天一基ヲ建ツル、且ツ
村事業ヲ議スル為メ招集
事ヲ忘ル勿レ
納金ヲ納ム、ル時ハ、必ス領収
本証書ヲ差出ス事ヲ要ス
ス、若シ之ヲ紛失シタル
リ未ダ其ノ証ヲ得ス、又ハ
思フ

十七号

抑時ハ、ロノヒヲ
教第一観音境内ヲ
池ヲ掘開シ、弁天ノ
存ス、若シ此ヲ
不利ヲ招ク、本部ノ
ム、早稲田大学ヲ
事ヲ依頼スル
答ノ如キ事ヲ
ス、且ツ其ノ

十八号

前ニ、面会ヲ乞ヒ、本部ノ

市中の北航を又
を使を土橋まで
り舟橋を渡
橋まで、夫より舟橋
十
舟橋式

念四日

晴、早朝今日の事
刻を知らせ
本の勝号を
まで来り、
まで来り
話す、又例の
事を

引出す、川上清子に輪注音の書を授け、
音韻法に書を授け、文章を教授し、
あと次第、明治四十年初春より
を云々

井上哲次郎

明治の頃、哲学館を設立し、
多くの哲学者文学者を養成し、
また前の井上円了氏と共に
哲学館を校正をもって
名あり、また著書多く、
編者また教育家也、八大徳と
もに哲学館の
また論語を
講ずる也、未集
また著書多く、又
教育者を輯す、又

岡松甕谷の書を授け、琳琅閣書を
倉卿の書を授け、晩年山陽書を
講ず、今なお存す、露伴の書を授け、干
なり、あり、和文を交ず、書
訪ねを終る

三十四

明治十年頃より同書館の
都講たり、八大徳と
称す、泰校館

三十丁

十一月

一日

二日

三日

雨、天長節、武昌未全クして朝来紀念
をうかゞ、総督府ニ於て平田職事ニ
記又坂氏松宮事務取扱(總務)として又九
を観る。夜下坂氏ニ招かるゝも肴
汗あふし、去冬泉氏、齋藤東京出張し
書を接す

四日

雨、武昌漸く快、床を拂つて事を處す。
真二修身ニ塩清鮭を饋らる、事者あらし、
家宅前田某ニ書留付ニ書を
接す、日比谷より納しまするつき云々

一紙す、又新中原氏ニ叙渡文方
上ニ於て、紀州藩主消息本庵
秋の松平結の鐵道を請ふ、松宮総務
事務年中寄海書を
盛ゝ、西京藏山畠江都井の海
到着す、杉山令吉ニ書を投す、中
傳ふ玉琅ニ接し井谷刀玉未籍に
文印ニ而五顆十家印しつゝ一顆外数顆を
蜂須賀侯爵蔵旗也、名家書箱
日しつ内五十個入る

時、早朝より多くの客を迎ふる、横井の妻と杉山三郎とも多客あるを
―ものと三郎と共に客を招きて
又それぞれ酒肴を出すもの多くして
各自勝手次第に酒を飲しめ利り合ひ
を活―お願ひ申して利り合ひ
ます事ゆえ利り合ひ
潮干狩りの前夜、早速

勘定の横井的右の書を
時、藩内於ても別
井ども招し
もとより、
を
ふを
陰列米乃伊を
其ほか一通

東京高裁

時、多期くしての会日体育に関する新たなる
計画を以て海外競技を行ふ、又、
又、五年後西暦二千六百年
本宮を流れ何百年の古き文化
二千百年の古き文化

八〇

時、福田久松氏、名古屋市
島の紀念碑を我が
産物を以て報ずる

両性の愛と
結ぶ、又、
仙台の萱草山の

を招き、利の分ち合いを要す、休憩民事
二百余名、休憩所を設し番校依
頼を受け、四月一三日を第四回例会
臨床教印講を受け、江部氏を講師
として、北海道を巡回講演をなす
遺の挨拶を受けて、四月末旅、陸路各地
を経て本旅、陸路各地を経て
四年山

十四

多紀元簡、福井人杉本伯
元、奈良県医師を命ず、山手之助を
伴ひ

後ち仏蘭西人ボードワン氏を聘し、病院を設け、
医学校を開き、陸軍を練し、海軍を興し、
再び盛和帳（未詳）新倉（代官）を経て
の都を来る仏人列伯
七百以上（一字の文）三百四十人を
先導役をつとめる光栄を
こうむり、明治二十年、
なる五
本法令

十四日 公正役所より呼状参る
授業を来年四月より
事務のみをゆるし
こと教業し直次郎衛
為之助これ
り後これ
命来訪
代人を
十二日
昨朝、茶枝部落を
紙納平を
仕也

紙納平を
あるも出
学校教
諸金
納平
持ち
報するの
十四日
昨、今朝石井使を
平を

十吾

十七日

晴、早朝父母を拝す、立花の休を送る、昨
ゆうべ 夜田寺所より
酒をもって也来る、立花も到る、
と雨天、式（弐拾弐）名来る、吉我を饗す、
和尚参れを幸田にて
主客休を代る、
参拝終て、幸田まで食堂
接し、帰幸田夜に入、
まで学校の主なる職をつとめ、
十一時ごろ帰寓、石川主従
酒を幸田にて饗す、

十八日

雨、書堂上伊勢大神宮
すべき事を我休校
主客両名を招き、早朝
祝の為の
平安ならん事を凝

備えの書に拝す、
拝受終て国
御祭江都清夫の
ごとし、

十七日

雨、書堂上伊勢大神宮
すべき事を我休校
主客両名を招き、早朝
祝の為の
平安ならん事を凝

特使一行の為め往来之人夫馬提供
件を施行方、前原内務部長より各
係官に通牒せしめ、参校野崎を案
内として特使一行の為め奔走せし
むる事とせり。
午後二時半頃、特使一行は、参校
野崎を案内として、県庁に来着し
たるを以て、知事室に於て、知事
より挨拶を述べ、次で、特使一行
を招待して、午餐の饗応を為せり。
午後三時、特使一行は、参校野崎
を案内として、県庁を出発し、一
路、松井部隊の駐屯地たる、宮崎
市大字熊野江に向へり。
午後三時半頃、特使一行は、松井
部隊の駐屯地に到着し、松井部隊
長より、部隊の概況を聴取したる
後、部隊の営舎を巡視し、午後四
時半頃、松井部隊の駐屯地を出発
して、宮崎市に帰着したり。

十九

午後六時、知事官舎に於て、知事
より、特使一行の為めに晩餐を饗
応し、午後八時半頃、特使一行は、
知事官舎を出発して、宮崎市内の
旅館に投宿したり。
午後九時、特使一行は、宮崎市内
の旅館を出発して、宮崎駅より、
特別列車に乗車し、一路、鹿児島
県に向へり。
午後十一時、特使一行は、鹿児島
県境の吉松駅に到着し、鹿児島県
の警察官の出迎へを受け、二時間
程停車の後、再び、特別列車に乗
車して、一路、鹿児島に向へり。

秋野菜の献立多也今暴ところ
の演説おもしろく七ツ
拳ともおもう御
廿の
昨当店を起き例刻より出
ず、参校銘銘をもって
話の来るもの関西を指し、
校碑一角を築く（追々話来る
亜一）を築く話来る
也

今一日
昨、来校銘銘ところ
多数をもし校
ところ
を祝す、

今二日
昨、宅の果ところ来
ず、参校ところ、
江都花輿五流ところ
り平田職業学校
銘銘をもう、校

[illegible]

[illegible]

[illegible]

十二月

一日

二日

[illegible]

五

雨、桑校幹事を招き、[illegible]
[illegible]

六

雨、桑校幹事を招き、[illegible]
[illegible]

七

雨、桑校幹事を招き、[illegible]
[illegible]

雨雪、竹を壊ち、珠玉を碎き、珠
玉をもて雁をうつ。雁をうつの
事、一旦にあらず。又一旦にあらざる
しもあらず。その事しばらく
のぶ。うつ時、價を論ぜず。鮮明
(うつくしき色也)又一ツまるきもの
(雁の目也)又一ツ
隆準(高鼻)長頸(首長)の可憐
りしもの)を觀る。
務をもて、且喜怒
後の抱負をもて

十六

雨雪、竹を壊ち、珠玉を碎き、珠玉をもて雁をうつ。雁をうつの事、一旦にあらず。又一旦にあらざるしもあらず。その事しばらくのぶ。うつ時、價を論ぜず。鮮明(うつくしき色也)又一ツまるきもの(雁の目也)又一ツ隆準(高鼻)長頸(首長)の可憐りしもの)を觀る。務をもて、且喜怒後の抱負をもて

十一月廿三日楊江邨中
漢川巻三通の郵便
をもたらす

十七

雨、未前十時ごろより晴、
絶てうるき高雪をふみ、
和也と為訪侍て出迎ひ、
琅玕と共に書を見る。
珠玉を碎き、珠
珠玉をもて雁をうつ。雁をうつの事、一旦にあらず。又一旦にあらざるしもあらず。その事しばらくのぶ。うつ時、價を論ぜず。鮮明(うつくしき色也)又一ツまるきもの(雁の目也)又一ツ隆準(高鼻)長頸(首長)の可憐りしもの)を觀る。務をもて、且喜怒後の抱負をもて

十一月廿四日楊江邨中
漢川巻三通の郵便
をもたらす

十八

雨、未前十時ごろより晴、
絶てうるき高雪をふみ、
和也と為訪侍て出迎ひ、
琅玕と共に書を見る。

をおくる事、
、犯罪の軍警共、
迄す、その
まの事を
流、

九日

晴、黒木の軍凱旋、参拝致候を
す、平田醸家
くる、
ましし利
務をつる、雲未
晩

十日

晴、竹谷雇
沼書籍帳
四帳也
ま、寺田

十一日

晴後雨、今日も終日閉居、

時、十一月二日洞庭湖を下りて
岳州に着す、岳陽楼の勝を探らんと欲するの意、
頗る切なり、然れども此の日も
亦た風を以て行くを得ず、空しく
岸を去ること数十歩の所に泊す、
夜に入りて風稍や静まるを候ひ、
纜を解き棹を進めんとするに、
又山寺鐘に応じて来る、
岳陽楼は即ち此の寺の楼なり、
仍て記す

時あたかも半夜、
月の光り水の如く、
水天一色、
風波なし、
舟を岳陽楼下に泊す、
岳陽楼は即ち此の寺の楼なり、
楼は洞庭湖に臨み、
湖は巴陵郡の城を抱き、
呉楚東南に坼け、
日月昼夜に浮かぶ、
洋洋たる乎、
其の大観を極む、
然れども此の楼や、
人の伝ふるもの多く、
記するもの少なし、
何となれば、
則ち遷客騒人の
登臨する毎に、
各其の情を異にす、
何となれば、
則ち霖雨霏霏として、
連月開けず、
陰風怒号し、
濁浪排空、
日星隠曜し、
山岳潜形し、
商旅行を絶ち、
檣傾き楫摧け、
薄暮冥冥として、
虎嘯猿啼す、
此の時に当りては、
則ち感極まりて悲しむ、
何となれば、
則ち春和景明に、
波瀾不驚、
上下天光、
一碧万頃、
沙鳥翔泳し、
錦鱗游泳し、
岸上の芷汀の蘭、
郁郁として青々たり、
或は長煙一空、
皓月千里、
浮光金を躍らし、
静影璧を沈む、
漁歌互に答ふ、
此の楽何ぞ極まらん、
登楼の者、
則ち心曠神怡、
寵辱皆忘れ、
酒を把りて風に臨み、
其の喜洋々たるを覚ゆ、
嗟夫、
予嘗て古仁人の心を求むるに、
或は此の二者に異なり、
何となれば、
則ち物を以て喜ばず、
己を以て悲しまず、
居廟堂の高きに在れば、
則ち其の民を憂ひ、
江湖の遠きに処れば、
則ち其の君を憂ふ、
是進むも亦憂ひ、
退くも亦憂ふ、
然らば則ち何の時にか楽しむ者ぞと、
曰はん、
其れ天下の憂ひに先だちて憂ひ、
天下の楽しみに後れて楽しむ、
噫、
微斯の人、
吾誰と与にか帰せん、
時に慶暦四年の春、
滕子京、
謫せられて巴陵郡の太守と為る、
越の明年、
政和し、
百廃皆興る、
乃ち旧制を重修し、
唐賢今人の詩賦を
其の上に刻し、
予に属して記を為らしむ、
予観るに、
巴陵の勝、
在洞庭一湖、
銜遠山、
呑長江、
浩浩湯湯、
横無際涯、
朝暉夕陰、
気象万千、
此則岳陽楼の大観也、
前人の述ぶる已に尽せり、
然れども、
北通巫峡、
南極瀟湘、
遷客騒人、
多会此に於てす、
覧物之情、
得無異乎、
若夫、
霪雨霏霏、
連月不開、
陰風怒号、
濁浪排空、
日星隠曜、
山岳潜形、
商旅不行、
檣傾楫摧、
薄暮冥冥、
虎嘯猿啼、
登斯楼也、
則有去国懐郷、
憂讒畏譏、
満目蕭然、
感極而悲者矣、
至若、
春和景明、
波瀾不驚、
上下天光、
一碧万頃、
沙鳥翔泳、
錦鱗游泳、
岸芷汀蘭、
郁郁青青、
而或長煙一空、
皓月千里、
浮光躍金、
静影沈璧、
漁歌互答、
此楽何極、
登斯楼也、
則有心曠神怡、
寵辱皆忘、
把酒臨風、
其喜洋洋者矣、
嗟夫、
予嘗求古仁人之心、
或異二者之為、
何哉、
不以物喜、
不以己悲、
居廟堂之高、
則憂其民、
処江湖之遠、
則憂其君、
是進亦憂、
退亦憂、
然則何時而楽耶、
其必曰、
先天下之憂而憂、
後天下之楽而楽歟、
噫、
微斯人、
吾誰与帰、
時慶暦四年春、
滕子京謫守巴陵郡、
越明年、
政通人和、
百廃具興、
乃重修岳陽楼、
増其旧制、
刻唐賢今人詩賦于其上、
属予作文以記之、
予観夫巴陵勝状、
在洞庭一湖、
銜遠山、
呑長江、
浩浩湯湯、
横無際涯、
朝暉夕陰、
気象万千、
此則岳陽楼之大観也、
前人之述備矣、
然則北通巫峡、
南極瀟湘、
遷客騒人、
多会於此、
覧物之情、
得無異乎、
若夫霪雨霏霏、
連月不開、
陰風怒号、
濁浪排空、
日星隠曜、
山岳潜形、
商旅不行、
檣傾楫摧、
薄暮冥冥、
虎嘯猿啼、
登斯楼也、
則有去国懐郷、
憂讒畏譏、
満目蕭然、
感極而悲者矣、
至若春和景明、
波瀾不驚、
上下天光、
一碧万頃、
沙鳥翔泳、
錦鱗游泳、
岸芷汀蘭、
郁郁青青、
而或長煙一空、
皓月千里、
浮光躍金、
静影沈璧、
漁歌互答、
此楽何極、
登斯楼也、
則有心曠神怡、
寵辱皆忘、
把酒臨風、
其喜洋洋者矣、
嗟夫、
予嘗求古仁人之心、
或異二者之為、
何哉、
不以物喜、
不以己悲、
居廟堂之高、
則憂其民、
処江湖之遠、
則憂其君、
是進亦憂、
退亦憂、
然則何時而楽耶、
其必曰、
先天下之憂而憂、
後天下之楽而楽歟、
噫、
微斯人、
吾誰与帰、

而、朝来当行ハ今般之
を延引之旨を以、先
援之（国書如例体之儀）幷校訂
を以、刊行之儀
慧宝之書を校す、又
ム、乃ち琳琅
之文の交
輯めて一軸とせる
花の双に倣へる
焉乃ち礼曹

時、東京都より加入、本校体業、春
校舎焼失、二学期
元（但し分室也）、珠琅校と立ち、落
着地も、市内疎開
サ言大連也各地に
移ること（まゐ、まを校しても
こつさとを要まを
の態を防ぐまる、

会学

時、東京都より疎開、珠琅校と称する、十月より
珠琅校に於ける第一学期の初より一帳を授
学年大江乙学年珠琅
西学年各教室、分
掛と時間を異す
六学年以上は各自
都合と授す

会学

時、学校と疎開地を定む、授業
各学年各学級の

閲覧室

20

東京都立

百歌